

20回目「時空を超えた繋がり」

こんにちは。一般財団法人UNI H&H大学院代表講師の植田です。
20回目は「時空を超えた繋がり」というテーマについてお話しします。

138億年前にビッグバンが起きて以降、宇宙は今なお加速膨張を続けていると考えられています。ビッグバンが起きる前には何があったか、科学的には未だ解明されていません。何も存在しなかったかもしれませんが、「真空」状態のようにあらゆる可能性を秘めた粒子が対生成しては対消滅し、全体のバランスを保っている調和の世界だったかもしれません。そのバランスが崩れて、現在のような物質世界ができあがったのではないかと考える学者もいます。時空間ができたことで、原子や電子などの粒子がそれぞれの座席を確保できるようになりました。これはヴェーダの文献でも同様のことが述べられています。現在までに素粒子と言われる物質の最小構成要素となる粒子はたくさん見つかっています。しかし、最小構成要素であるはずの素粒子がこんなにたくさん見つかるのは不思議だ、きっとさらに根底にはそれらのベースとなる「何か」があるに違いない、このように理論物理学者たちは考えました。

トニー・ネイダー博士がヴェーダ研究を通じて「万物の根源は波動である」ということを発見した通り、最新の理論物理学においても、あらゆる物質、動植物、人間も含めて万物を構成している最小単位は「振動するひものようなもの」であると考えられるようになり、この理論は40年以上に渡って世界中で反証（反論）に耐えている有力な考え方です（超紐理論）。これはバイオリンの弦のように、弾き方次第で音色が変わるのと同じことが目には見えないミクロの世界では起こっていて、その振動がマクロの世界では今皆さんが目の前で経験している物事のように目に見えて認識できているといいます。ミクロの世界が全てこのようなひもの振動で満ち満ちていることを考えると、私たちの五感を通じて変換された情報や認識というものは一種のまやかし（幻想）のようにも思えてきます。実際にヴェーダ文献は、私たちが現実と思っている世界はマーヤ（幻想・夢）であると述べています。これはお釈迦様の「無明・無知・執着が悩み苦しみの原因である」という言葉にも通ずるものですが、この三次元で認識できる世界を現実のものとして捉えてしまうことこそが大いなる誤謬（ごびゅう）であるということです。そしてこれは、外の世界はまやかして、内なる世界にこそ真実があることを教えてくれています。また、超紐理論では、この世界は9次元空間で構成されていると考えないと数式で美しく表現できないことが分かり、この考え方が主導権を握りつつあります。これは、3次元に生きていると思っている私たちには理解しがたいことですが、残りの6次元は折り畳まれていて認識できないといいます。以上のように、宗教的にも科学的にも現代では高次元の存在や全体場、時空を超えた繋がりについて議論が交わされることが多くなり、人々の意識も徐々に変わってきています。

万物が根底の部分で響きあい繋がりあいできているとされるこの世界では、放った波動は距離を超えて伝わり、必ず何らかの形で返ってきます（エネルギー保存の法則 / 自業自得）から、常日頃からどのような気持ちで、意識でいるかということを実感し、その認識を深めることが重要となります。外に答えを求めず、自らの内側に真実を見るためにも、日々SO-AM呼吸瞑想を始めとした瞑想や内観に励み、いつも愛に溢れた波動を放ち、宇宙と絶対的な調和をもってそれぞれの人生を歩み進めましょう。

では、今回学んだことをぜひ日々の快禅メソッドの実践においても意識して取り組んでみましょう。20回目の動画は以上です。次回は最終回です。またお会いしましょう。